シリーズ・開業

開業しました

菅　千束
すが皮ふ科
（藤沢市）

平成22年６月に藤沢市湘南台に開業しました菅 千束（すが ちづか）と申します。

昭和60年に横浜市立大学医学部を卒業し、大学病院で研修、皮膚科学教室に入局、大学病院横浜南共済病院で勤務、出産育児で非常勤勤務と常勤復帰を子供３人分くり返しているうちに内科医の夫が平成14年に湘南台に内科クリニックを開業しました。

はじめは週１回だけ内科クリニック内で皮膚科外来を開き、他の日は近くの藤沢湘南台病院に勤務していたのですが、徐々に外来コマ数を増やしていきました。面倒な庶務は夫まかせにして、勤務医としてやっていこうと思っていたのですが、平成21年秋に新型インフルエンザが蔓延し、熱発の患者さんがおしよせ、何とか待合室をわけて対応したのですが、せっかく来ていただくようになった皮膚科の患者さんに多大な迷惑をかけている事実をまのあたりにして、これではいけないと皮膚科の分離を決心しました。

湘南台は、昭和初期からの小田急線に加えて、平成12年には横浜市営地下鉄と相模鉄道がのりいれて、突然３線が利用できる町にかわり、マンションやテナントが急速に増えていました。内科クリニックは耐震基準設定前の築30年の古いマンションの一階で、中央に通路をはさんだ向かい側は５つの小区画のテナントとして募集していて両端の２カ所は焼き鳥屋さんとパブがはいったあと、近隣に新しいテナントが増える中で、空いたままの状態でした。真ん中の空いているところに内科クリニックを拡大しようとしたところが、通路がはいると一医療機関としては申請できないということで、一時断念していたのですが、皮膚科クリニックとして新たな医療機関とすれば広いスペースを確保できると、思い切って独立開業とすることにしました。

道路からは見えない通路の奥に位置し、看板は焼き鳥屋さんとパブにはさまれてかかる格好ですが、内科クリニックに来た方には目にはいると楽観視して始めることにしました。患者さんには、ゆったりとリラックスしていただきたいと願い、またシックハウス対策にもなると考えて、内装は自宅を建ててもらった自然素材を扱う地元の建設会社にお願いしました。無垢の木の床に珪藻土の壁、建具も無垢の木でなどと夢みたのですが、衛生面での管理が難しいのと予算の関係で珪藻土の壁は諦め、それでもできるだけ自然素材で自宅にいるようにくつろげる空間をめざしました。同じ好みの患者さんからはここに住みたいなんて言ってもらえています。始めてみて、両隣が焼き鳥屋さんとパブで夜間営業されているのは、防犯上安心なことに気づきました。数年前に湘南台の歯科医院で診療終了後に強盗がはいったことがありましたが、ここでは、診療終了あたりからかえって人通りが増え、朝出勤するころお隣のパブはまだ営業されていることもあって、24時間安心です。おはようございます、おつかれさまと言い合っています。

電子カルテは内科クリニックと同じ三菱化学のm-KARTEを導入し、受付スタッフには開業前に内科で修行してもらっておいたので、アナログ人間の私はレセコンと電子カルテについては受付スタッフに頼りきっています。また、内科で使用しているレントゲンや内視鏡写真をとりこむ画像ファイリングシステムを皮膚科でも導入しました。保険証や書状を保存でき、ダーモスコピーの画像をファイリングするとディスプレイで拡大して見られるので、患者さんへの説明に便利です。インターネット予約シス

テムも内科クリニックからの継続で導入し、こちらのほうは皮膚科の方が予約して来られる患者さんが多く助かっています。

藤沢市民病院の前皮膚科部長の小松平先生が声をかけてくださって、平成15年から週1回外来を担当させていただいています。現在も小野田雅仁先生が快く承諾してくださって、毎週火曜日の午前中の外来のひとコマを担当しています。とても勉強になり、また紹介して相談もできるので開業してからも火曜日は休診にしてうかがっています。午後は在宅の方や障害者施設に往診に行くようにしています。木曜日は内科クリニックと一緒に休診にしているので、月水金土の4日間のみの診療で、お正月やお盆のときは1ヶ月の半分以上は休診となってしまい、お隣の焼き鳥屋さんのおじさんから休みばっかりとあきれられていますが、自分の技量を考えてこのくらいがいいペースかなとお許しをいただいております。

スタッフと

生まれ育った藤沢市で皆様に支えられながら診療できることは感謝にたえません。微力ながら地域の皆様に貢献できるようがんばっていきたいと思います。神奈川県皮膚科医会の先生方には今後ともご指導のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

“はじめまして”

原田昭一郎
原田皮フ科
(川崎市宮前区)

平成21年6月に川崎市宮前区の東急田園都市線鷺沼駅近くで原田皮フ科を開院いたしました原田昭一郎と申します。約2年近くが経ちましたが、まだまだ新参者でございますので、まず自己紹介からさせていただきます。

杏林大学医学部卒業後、昭和大学医学部皮膚科学教室に入局。飯島正文教授のもとで研修し、大学やその関連病院で勤務しました（実は以前、横浜市にある関連病院勤務時に神奈川県皮膚科医会に入会したのですが、その後すぐに異動で県外へ転勤し、退会の手続きを怠ってしまったため、会にご迷惑をおかけいたしました。滝沢皮膚科の滝沢清宏院長をはじめ諸先生方のお計らいでこのまま会員で居させていただけました。あらためて御礼申し上げます）。その際に飯島先生から皮膚外科の分野を特にしっかりやれとの指示があり、虎の門病院皮膚科の大原国章部長のもとで、国内留学というかたちで勉強させていただきました。

その後大学に戻り、それこそ皮膚外科中心の病棟、外来生活を送り、NTT東日本関東病院皮膚科に異動後も、五十嵐敦之部長のもと、多くの皮膚外科治療の機会を与えていただきました。ですから得意分野や専門分野といえばやはり皮膚外科的な方向になります。そして10数年になる大学や総合病院での勤務医生活を終え、いずれは開業しようという気持ちもあり、医療法人社団廣仁会（札幌市を中心とした複数の皮膚科クリニックを持つ）の浅沼廣幸理事長、根本治副理事長のもとで、開業医としてのノウハウを学ぶべく札幌市に転勤し、勤務させていただけるようになりました。医療はサービス業であるという考えのもと、着任早々今まで経験ないほどの大勢の患者さんを前に、いかにお待たせしないでしっ

かり診察して充分説明をするかという相反する要求に、戸惑い焦り頭が混乱したことを覚えています。大学や総合病院でのスタイルはここでは全く通用せず、身近でよくある疾患を迅速にしっかりと的確に扱うことの重要さを教えられました。そんなこんなで数年を北海道で過ごし、いよいよ開業することになりました。

開業にあたり、皮膚科医である父や滝沢先生、浅沼先生をはじめとする諸先生方に相談をし、開業地などのアドバイスをいただき、色々考えた結果、東急田園都市線鷺沼駅近くのビル７階の物件に決めました。従兄弟が隣駅のたまプラーザに住んでいて、昔よく遊びに行き、なつかしさもありすぐに気に入りました。そこからは物件の契約やら内装業者（医科歯科薬局専門）を決めてその担当者との打ち合わせやらで、まだ廣仁会に勤務していたので（平成21年４月中旬まで勤務）数カ月間ほぼ毎週末に１泊２日で札幌と鷺沼の往復をするはめになりました。たびたび大雪で飛行機が飛ばなかったり遅れたりして仕事に戻れなくなりそうになり、毎週ハラハラの連続でした。６月１日開院の日程が決まり、むこうを引き上げた後は、内装工事進行具合のチェックや医療器具、備品の調達や従業員の募集、面接の実施や様々な業者との打ち合わせ、契約や役所関係への事務処理や周囲へのあいさつ回りなど準備期間が少ないせいもあり本当にバタバタしました。しかし滝沢先生、浅沼先生、廣仁会関係者様が現地まで来られ色々助けてくださり、なんとか開院の日を迎えることができました。本当に皆様に感謝しております。ありがとうございました。

いざ開院してみると、患者さんはパラパラとで暇な日々が続きました。手術希望の方が来院されると即実施できたので、喜ばれるどころか逆に驚かれていました。まあ手術を１日に何件もできてしまうので自分自身は久しぶりのことでもあり嫌いではなかったですが。その後は少しずつですが認知されてきて来院者数が増えましたが、まだまだお恥ずかしいかぎりです。当科ではナローバンドUVBを導入しているので、それが目的で紹介された方の割合が比較的多いかと思います。また自分が従業員を雇うという、生まれて初めてのことでもあったのですが、これがとてもデリケートで神経をつかうことであると実感しました。浅沼先生から開院して半年で従業員の半分は入れ替わるよとアドバイスされてはいましたが、まさにそのとおりでした。色々な思惑をもって人は集まってきますのでこれはどうしようもないかもしれませんが、人の出入りのたびに右往左往しました。最近はさすがに落ち着いてきましたが、今後常についてまわる課題であると思います。

このようにすでに開業なさった先生方からみると当たり前で、必ず通らなければならない道なのでしょうが、まだまだスタート間もなく、悪戦苦闘中です。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

美容皮膚科のあるべき姿

濱野英明
テティス横濱美容皮膚科
（横浜市中区）

この度、３月11日（金）に発生した「東北地方太平洋沖地震」により、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様、そのご家族の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復旧復興をスタッフ一同、お祈り申し上げます。

震災のあった３月11日からさかのぼること約４か月、平成22年11月19日、JR桜木町駅前という最高の立地で『テティス横濱美容皮膚科』を開院いたしました。当院は100％自由診療であり、施術できる内容はフォトフェイシャル、レーザー、ピーリング、メソポレーション、フィラー、脱毛など、一般

的にいう美容医療です。開業当初は来院数０という日が多くありましたが、１か月経過した頃から安定した来院数を確保できるようになり、今では様々な患者さんが足を運んでくれるようになりました。美容というと30代以降の女性が大半かとおもいきや、時代の流れでしょうか、若いかたはもちろん高齢のかたも男性も、幅広く来院されており、美容に対する関心が高いことがよくわかります。

一見華やかなイメージのある美容分野での開業ですが、やはり起業ということなので、日を追うごとに大変さを身に染みて感じており、勤務医でいる時とは全く違う仕事をしているようです。診療のほかにも経営、広告、スタッフ人事、教育、人付き合い、様々なことを次々とまたは同時にこなしていかねばなりません。しかしこんな大変な思いをしてまで、美容をやりたい、開業したい、また、やめたいと思わないのは、次のような理由があったからです。

私は開業以前、慶應義塾大学皮膚科学教室に在籍しており、一般皮膚科を主として勤務してまいりました。様々な症例にあたり、恩師から教えをいただき、自分で考え、治療し、さらに考えの日々でした。そのような中で、保険診療内ではどうしても太刀打ちできない症例もでてきました。患者さんには「当院では何もできない、しょうがないから」の一言でごまかすこともありました。しかし、自分の職場でできない治療でも、「こういう治療もありますよ」の説明があるのとないのではだいぶ違うのではないかという考えのもと、いわゆるレーザーなどの治療方法や考え方を学び始めました。自分の皮膚科医としての幅をもっとひろくしたい、美容にふれたのはそのような考えからでした。さらには美容を学んでいく段階で、やりたいようにやるには開業しかないと思ったことが決定打になったと思います。また、現在おかれている美容皮膚科のありかたにも疑問があったことも一要因です。

美容皮膚科とはどんな分野でしょうか。簡単に言えば、その名の通り皮膚科のなかでも美容に特化したもの、難しく言えば、根拠に基づいた医療を中心に皮膚の生理的構造やメカニズムを研究し、その成果を臨床治療に応用する既存の臨床皮膚科学と、ビジネスとしての美容分野が融合し、「根拠のある美容治療」を目指すことでしょう。しかしこのような考えをもって開業されている美容皮膚科クリニックがどれだけ存在するのか疑問に思うところがあります。世間一般からはエステと混同されたり、美容外科との違いをわかってもらえなかったり、また同業者からも単純な金儲けと過小評価されるといったこともあります。しかしそれも上記のような考えをもって開業されているかたが少ないことや皮膚科の知識がなくとも開業してやっていけると思われがちなところではないでしょうか。もちろん自由診療であり、ビジネスという考えは切っても切り離せません。ですが、根本は医療であり病を治すことであることを忘れてはならない分野です。さらに美容皮膚科は皮膚科の一部であり、一般皮膚科の知識なくしては語れません。昨今、美容皮膚科は増えつつありますが、間違った知識、技術は止めなければなりません。私自身まだまだ半人前ですが、それでも一般皮膚科の知識、経験があるからこそ自信を持って美容皮膚科の医療を提供できると思っており、このような考えの普及が私の使命でもあると感じています。

今後の展開として（まだまだ先の話ですが）、やはり一般皮膚科と美容皮膚科の併設が目標です。片手間で美容をやるのではなく、あくまでも並列でやれることです。保険診療内でできることも、自由診療だからできることもすべてカバーした皮膚医療が今後求められるところとなるでしょう。美容に興味がないでは皮膚科医は務まらない時代がきつつあります。皮膚科といえども美容も含めた知識、経験が必要となっていくでしょう。そんな時に美容皮膚科の分野において第一線でありたいと思っており、日々努力していく所存です。今後ともみなさまにご協力願うことが多々あると思います。どうぞこれからもよろしくお願い申し上げます。

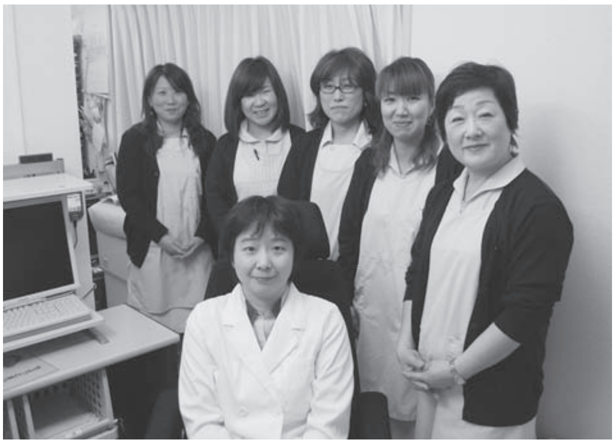
開業雑記

根岸　晶
片倉皮膚科
（小田原市）

私は平成21年４月に父片倉仁志の後任として、小田原市にある片倉皮膚科の院長となりました。その前月まで小田原市立病院に勤務しており、あわただしく、開業医としての一歩をふみだしました。現在では院長、事務長、看護師１名、事務員２名、パート事務員４名、パート薬剤師１名の総勢10名で運営しています。薬は先代から引き続き院内処方を採用しました。建物設備はそのまま活用したため、大きな設備投資はなく簡単なリフォームと業者による大掃除くらいでした。しかしこの大掃除が思ったより難航しました。開院以来15年間の書類や器具、古いサンプル、グッズがあちこちから山のようにでてきました。前院長である父がかたづけられない、捨てられない人間であることが災いしてかその数は膨大で、ぎっちりで開かない引き出しや、開かずの段ボールも数多くありました。その教訓を生かし、今では物をためないように、不要書類や使わない器材などは早めに処分するようにしています。

そもそも片倉皮膚科は平成５年に小田原市栄町に設立されました。小田原駅西口から数分の古くからの商業地にあります。周辺には老舗の茶問屋や乾物問屋があり､往年の城下町をしのぶことができます。しかしながら近年は開発が進み、駅に近づくにつれマンションやディスカウントストアが立ち並ぶ雑多な町並みとなっています。

患者域は小田原市が中心ですが、南足柄市、箱根町、はるばる熱海市からもいらっしゃることがあります。患者層は､昨今の日本の高齢化を反映してか、高齢者の来院が多くみられます。元気なお年寄りが多く、90歳代でもごく普通に来院され、カルテの年齢をみて驚くこともしばしばです。私見では、自営業が多く、年をとっても商売や畑仕事をしているのがよいのではないかと考えています。子供も比較的多く来院します。付添いの保護者はおおむね母親ですが、父親だけも意外に多く、乳児のおむつ替えや、幼児の着替えなども上手にしています。またおばあさんが孫を連れて同時に診察をうける例も多く、共働き増加を反映しているのでしょうか。開業すると患者さんとの距離が縮み、待合室から診察、会計、および薬までみることができ、こういった細かい患者背景にも気づくことができ、大変診療に役立っています。特に子供では家庭環境と親の性格とで治療に対する姿勢も違うためこれまでももっと注意を払うべきだったと反省しました。



スタッフ一同と（中央が筆者）

職業では都市部よりもサラリーマン比率が低く、商業、農林水産業、観光業などさまざまな職業の方がみえます。私はこれまで大学病院と、都市部の市立病院に勤めていたため、成人男性は住宅地に住む会社員を診療することがほとんどでした。このためあまり職業、生活空間を意識することなく診察してきました。しかし小田原では漁師さんの診察の次は農家の方で、その次は銀行員といったように背景がバラバラなので、同じ手荒れでも経過が全然違うこともあります。夏にどうみてもしもやけにみえる患者さんがきて、「膠原病だろうか、しかしそれにしても真夏にこんなにひどいしもやけ？」と色々悩んだのですが、干物加工業の方で、毎日マイナス４℃の冷凍庫で長時間作業することがわかり診断確定し

ました。

開業医になり２年が過ぎましたが、日々新たな発見がありまだまだ未熟で反省しきりです。また近隣の内科を始めとする他科の開業医の先生方にも大変にお世話になり、地域連携、病診連携の大切さを感じました。これからも地域に根差して精進していきたいと思います。

この神皮の原稿依頼を受けた後、平成23年３月11日に未曾有の大災害が起こりました。この東日本大震災の犠牲者の方々のご冥福をお祈りし、避難者の方々の生活の安定と一日も早い復興を願います。医師のはしくれとしておのれの無力に恥じ入るばかりです。計画停電、原発事故に伴う汚染等、懸念は尽きません。日々の診療を充実させ、地域の皆さんの不安を解消していくことを第一に努力していきたいと思います。

開業の頃

相原英雄

あいはらクリニック皮フ科形成外科
（横浜市鶴見区）

「何かを得るためには何かを失わなければならない」

物事を始めるときには、それに専念して真剣に行わなければいけないという戒めの言葉です。

2008年６月､眩しい日差しの見え始めた新緑の頃、僕は勤務医をやめて開業医になりました。

大学病院に10年間、次の12年間は済生会平塚病院で皮膚科・形成外科医長としてがむしゃらに勤務した後､横浜市鶴見区矢向のメディカルモールで｢あいはらクリニック皮フ科形成外科」を開業して、３年近くが過ぎました。開業を決めた頃に聞こえてくる噂といえば、社会情勢や景気の悪化による診療抑制、保険点数の引下げなど開業医にとって不利な情報ばかりでした。これからは開業医にとって冬の時代がやってくるのだ､と言われていました。しかし、それでも迷いはありませんでした。自分のクリニックを始めるのだ、という期待で一杯でした。

その頃は、今考えても一生懸命でした。妻と２人で東奔西走したことが思い出されます。とにかく、行わなくてはいけない内容が山のようにあったからです。一番重要なことは、開業場所の選択です。休日のたびに何か所も下見に行きました。開業の場所は､自分の望む開業形態と直結するので慎重でした。場所が決まってからも､クリニックの内装の設計で、何度もミーティングが行われました。

医院設計の上でこだわりたいと思ったことが２点あります。ひとつは手術室です。皮膚科形成外科の標榜をするため、また近隣に手術室を持って手術をしている皮膚科がなかったため、作りたいと思い、実行しました。今考えると、やはり手術室を作ってよかったと思います。近隣の先生方からのご紹介などもあり、思ったより手術数が多かったからです。細かい手術では、やはり無影灯の下で慎重に行いたいものです。もうひとつのこだわりはレーザーの導入です。大学を含めて20年間以上、１万件にも及ぶレーザー治療を行ってきたので（また博士号もレーザー研究でとらせていただいたため）ぜひとも必要と考えました｡そこで､まずは炭酸ガスレーザーを導入しました。現在こちらも、小腫瘍やホクロの焼灼にフル稼働の状態です。

診療時間も考えました。患者さんが来院しやすいようにと、土曜日は夕方まで、それから日曜日の朝も診察をすることにしました。ただでさえ診察日が多いのに、開業当初はクリニックの休診日である木曜も、他院での勤務をしておりました。まったくの休日なしの状況です。当初は気が張っていたため頑張れたのですが、さすがに疲れたため、３カ月で木曜日の勤務はやめさせていただきました。

病院で勤務医をしていた時は、今来院している患

者さんは大病院だから受診しているのだ、自分個人に受診しているのではないのだと思うようにしていました。なぜなら開業しても、その患者さんが全て自分のクリニックに来院するわけではない、という話を何度も聞かされていたからです。「患者さんは病院についているのだ、勘違いするな」と自分に言い聞かせていました。

そう思っていたのですが、開業してからも済生会平塚病院から何人もの患者さんが来院して下さいました。新しいクリニックは以前の病院から電車で１時間以上も離れており、通院は難しいだろうと思っていたのですが、顔見知りの患者さんが突然ひょいと現れて、

「やっと見つけたよ先生の病院」

などと言われますと、熱いものがぐっと胸にこみ上げてきました。

現在では、毎日の外来で、自分のできることを患者さんと向き合って診療しています。思うに、この３年間、僕は開業医になろうとして必死だったと思います。と同時に、自分自身の生活や環境を見つめ直すための、よい期間でもあったように思います。失ったものはあるにせよ、開業して得たものは「医師個人としてのやりがいとプライド」ではないかと思うのです。

幸いにもスタッフにも恵まれました。開院初年度からずっと変わらないメンバーがクリニックを引っ張ってくれます。新しく入ったメンバーも元気でやる気のある人ばかりです。この春には周囲の皆様に助けられて、横浜市より最短で法人許可をいただきました。スタッフとともに「医療法人　健希会　あいはらクリニック皮フ科形成外科」として、新しい気持ちで再出発をしたいと考えている次第です。健希会とは､「健やかになることを願っているクリニック」という意味でつけました。

この場を借りまして、いつもご指導していただいている諸先輩方、紹介患者を送っていただいている近隣の先生方、いつも励ましてくれるスタッフの皆様、そしていつも見守ってくれる僕の家族にも、心からの感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。そして、これからもよろしくお願い申し上げます。